

# 付録 対談「中核層」が主導する情報社会の変革

## 政府と市場の亀裂は修復可能か



**公文俊平**（くもん しゅんぺい）  
多摩大学情報社会学研究所所長。  
東京大学経済学部卒業。専門は社会システム論、  
国際関係論。



**牛尾治朗**（うしお じろう）  
NIRA会長。ウシオ電機株式会社代表取締役会長。  
公益社団法人経済同友会終身幹事。

### 脱原発論にも似た「ゼロ成長論」

**牛尾** 『Voice』2013年7月号で、私は、日本が情報化やグローバル化に適応していくためには、「中核層」を軸に社会を築く必要があると書きました。中核層とは、自分の生き方を選択し、社会とのつながりを意識して生きていく人びとのことです。かつて高度経済成長の末期に大平総理が9つの政策委員会を設置し、そこから「新中間層」という言葉が生まれました。これも、時代の変革期に、社会の軸となる層が必要とされたからだだと思います。

本日は、当時の議論に参加され、その後も情報社会をご専門に研究しておられる公文俊平先生と対談する機会を与えていただきました。まずは、当時のお話をお聞かせいただけますか。

**公文** 大平内閣時代で、私の記憶にいちばん鮮明に残っているのは、佐藤誠三郎(元東京大学教授)、香山健一(元学習院大学教授)、私の3人が一緒になって取り組んだ仕事です。3人のなかでは私がいちばん若く、2人のあとに付いていろいろなことをやっていました。私たちは、当時、マルクス主義、学生運動が盛んだった東京大学の駒場で学生のときに知り合った。戦後体験は同じ、いってみれば大人不信であり、貧しさを何とか克服しなければなら

ないということでした。そんな共通項もあり、お互いに信頼できる仲間だと思ったのです。

ところが実際に関わった学生運動は、失敗そのものだった。社会主義・共産主義の国の現実とはどうかというと、これも、とんでもないということがわかってきた。また左翼の見方では、国民は貧しくなる一方で明日にも革命が起こるというけれども、当時の日本では、復興と経済成長が順調に進んでいて現実とは全然違うことに気がきました。

その後、大学院を卒業してからは、私たちは別々の研究活動に入りました。香山さんは、社会学者の清水幾太郎さん(元学習院大学教授)のゼミや研究会で活躍して、未来学者として世の中に知られるようになりました。そのころから牛尾さんともだんだん接点ができていったのだろうと思います。佐藤さんは日本政治、とくに「55年体制」の意味をポジティブに評価して頭角を現していったと思います。私は1960年代の初めに米国に留学して、ソ連論それからシステム論、社会システム論を勉強しました。

その後、われわれ3人が再び活動を共にするようになったのは、近代経済学も含めた社会科学それから科学技術の有用性を積極的に認め、現体制を批判するだけが能ではなくて、むしろ体制に積極的に参加して貢献すべきではない

かということで、考えが一致したからです。これも別に申し合わせたわけではないのですが、気が付いてみると、同じように考えるようになっていたということです。

**牛尾** 当時の日本経済は、ニクソン・ショックとオイル・ショックに直面し、「円安・エネルギー安」という成長から「円高・エネルギー高」という新しい局面に移行せざるをえなかった。小型化と省石油による発展を選択した日本は、科学技術の進歩を無視するわけにはいかなかった。

**公文** そうです。しかし一方で、このまま人口増加や産業化などが続けば100年以内に人類は衰退に向かう、というローマ・クラブの「成長の限界」論が出されました。香山さんがすぐに、これを議論せねばならぬというので、ローマ・クラブの日本委員会に入って研究会を組織し、私も参加しました。しかし、当時のゼロ成長論は、いまの反原発・脱原発論にも似たところがあって、やみくもに「くたばれGNPだ、ゼロ成長だ」と言い募るので、これはちょっとおかしい、むしろ技術進歩による成長の可能性を現実的に評価すべきだと考えた。

世の中は一種の魔女狩りのような様相を呈しまして、公害企業がたたかれ、自動車の排気ガス問題などが非常に大きな話題になっていた。じつはそのとき、とても実直な技術者の方から「本当のところ、いまの排気ガス規制(米国マスキー法)をクリアするのはとても無理です」という話を聞かされた。そこで、牛尾会長が設立し私たち3人が拠点としていた社会工学研究所で行った「現代の魔女狩り」批判のなかで、自動車の排気ガス規制は行き過ぎだということを書いていたのですが、その後すぐにホンダが低公害エンジンを開発し、あっさり排気ガス規制をクリアした。

そこでわれわれは、何で日本はこんなに強いのだろうか、どうやって日本の近代化は成立したのか、あるいは可能であったのか、ということを実面目に研究してみる必要があると考えた。そのころ駒場の同僚だった村上泰亮さんが、日本の近代化の歴史をさかのぼってみなければいけない、日本社会の特徴や現在の日本の国のあり方は過去の歴史と緊密に関係しているに違いないと言いだめたのです。佐藤さんと私も大賛成で、当時、イエ社会とかムラ社会ということがいわれていたのですけれども、いろいろ調べてみると、ムラよりも、イエが重要なのだ、日本の社会進化の中心にあるのだということで、「イエ社会の近代化」論を3人で展開しました。

**牛尾** 日本の企業では従業員を大切にしている企業一家主義という流れがあって、私は、当時「従業員シンジケート」という論文を書いたりもしていました。

**公文** そうですね。私も刺激を受けました。その後、『文明としてのイエ社会』を79年によく3人の共著として出版し、その延長線上で、新中間層という村上さんの言葉でいえば「新中間大衆」に多くを期待する議論が展開されました。しかし、ここで問題がありました。はたして、イエ社会の強さは今後も続くのか。とくに石油危機のような危機を日本は乗り越えていけるだろうか、ということです。当時の状況からみて、イエ社会が適応していけることは間違いないとは思ったのですが、経済界では、これまでのように企業が丸抱えのイエ型企業をやっていくのは無理なのだ、という減量経営論が主流になりました。

**牛尾** 石油危機を機に、日本の企業一家主義が崩れ始め、日本社会が大きな変革期を迎えたのだと思います。

**公文** そのころ、悔しかったのは、大平内閣になって第2次石油危機が起こったときのことです。東京でサミットが開催され、各国の原油の割り当てを減らすという話になった。サミットの期間中に、日本抜きで各国首脳が集まりました。日本を標的にしたのです。大平さんは、何とかひどい削減にならないようにというので、本当に苦労された。ところが、私たちがデータを調べてみると、すでに石油原単位は低下していてそんなに石油は必要ない状況になっていることがわかった。このまま行けるなら、サミットでいうようなハードルは存在しないに等しいのだと気が付いて、それも申し上げた。しかし、当時の通産省の考えは違っていました。しかも、あのときに、あろうことが備蓄の積み増しをやったんです。

そのときに、備蓄は役に立たないと痛感しました。使うべきときに使わない備蓄は、備蓄がないより悪いですね。あのとき本当に大平さんは体を壊されて寿命が縮まったのではないかと、いまでも悲しいです。

**牛尾** 西欧社会が石油消費を急激に増やす日本に対して排他的だった。だからいっそう夜眠れなかったんだよ。

**公文** ええ。そういうなかで、私たちは田中内閣時代からはっきりしてきた福祉政策、福祉の拡大への批判を行おうとしたのです。福祉の拡大自体は別に悪くはないけれども、これをやり過ぎたらとんでもないことになる。まして人びとがそれを当然の権利と見なして、ますます多くを要求するようになったら、これは日本がもたないと思いま

した。そこで、「日本の自殺」という論文を香山さんが書いて、『文藝春秋』1974年6月号に匿名のグループ名で載せました。いわゆる「パンとサーカス」の批判です。それが土光さんの目に留まったのです。私はそのグループの1人でしたが、メンバー全員の名前は、いまでも伏せられています。皆他界してしまったことは残念でなりません。

その後、匿名でやるのもいいけれども、表に出て本格的に政権を学者が支える、あるいは官僚も一緒に入って支えるべきだということになりました。

## 時代を循環で捉えた「15年周期説」

**牛尾** そこで大平内閣が設置した政策研究グループに参加することになった。

**公文** そのときに面白かったのは、関西から大挙して多くの識者が参加されたことです。おそらくは、梅棹忠夫さんが大号令をかけたのだと思います。

**牛尾** 高坂正堯先生と山崎正和先生は当初から入っていたが、梅棹さんが田園都市国家構想の座長になって、彼の親しい仲間が加わった。

**公文** そうなんです。それで東京の連中だけに任せてはおけん、行けというので、みんなやって来たということを知りました。それが非常によかったですね。京都と反目するんじゃなくて、一緒に手を組んでやった。しかも、その研究会は座長には大物の先生方をお願いしたんですけれども、中心の運営は若手の幹事でした。

当時、アメリカとの対外経済摩擦が生じ、アメリカからの要求が厳しくなった。そのため、何とかしなきゃいかんという話になった。しかし政策研究グループの結論が出るのはだいぶ先だから、幹事が中心になって機動的な対応をすることになった。そこで学者を中心とした幹事が集まって、かなり時間をかけて相談をして、文書をつくりました。しかし内部から異論が出て、結局正式なものにはなりませんでしたが、のちの「前川レポート」なんかに近いような内容のものでした。それはともかく、全体としての大平研究会はかなり順調に進んだと思います。

**牛尾** 大平研究会は、学者の人が自分の考えを精いっぱい発露して、行政にも影響を与えながら考え方をまとめた唯一のケースでしょう。

**公文** そうですね。このときに私が刺激を受けたのと同時に知恵を絞ることになったのは、大平さんの哲学、時代認識です。大平総理は、いまは近代を超える時代である

と考えられて、「経済の時代から文化の時代へ」とおっしゃいました。しかし、私は、どう考えても近代が終わるとは思えませんでした。近代を反省するのはいいけれども、近代を超えるのは困難ではないかと思いました。経済の時代から文化の時代へというけれど、経済の時代がなくなるわけもないだろうとも。ではいったいどうしたらいいだろう、というので非常に悩みました。

それがいまに至っているのですけれども、そのとき考えたことが2つありました。1つは、短期の問題として、いわば経済が云々されている時代から文化が云々されている時代に移ることは当然ありうるだろうと考えました。そこで目を付けたのが、「15年周期説」です。

石油ショックの直後から、15年周期説的な議論が論壇に出てきました。経済の時代が1960年から75年まで続いた。その前の45年から60年までは、いわば政治の時代で、その前の30年から45年は戦争の時代だったじゃないか。さらにその前の15年間は、いわば大正末から昭和初めの文化の時代とっていい。というふうにと考えると、文化、紛争、政治、経済というようなかたちでほぼ15年ごとに、全体としてはほぼ60年ごとに、時代というか局面が循環していると考えたらいいではないか。

ならば、これから2度目の文化の時代になり、さらにその先の15年はかつての戦争の時代に匹敵するような混乱と紛争の時代になる。ただ、軍事的な戦争は考えにくいので、いってみれば経済摩擦、経済戦争の時代になるのではないかと考えてみました。

もう1つ、より長期的にはどうか。近代そのものによくつかの局面があると考えたべきではないか。近代の始まりを国際政治学でいう主権国家が生まれたころと捉えると、16世紀の後半から200年ほど、いわば軍事政治国家中心の局面が続いた。その後、18世紀の後半から200年ほどが、まさに経済中心の産業化の局面になった。そう考えると、20世紀の後半から、近代のなかでの新しい第三の局面に入ることになります。そこで、これだと思ったのが、そのころからいわれられていた情報化、情報革命です。香山さんは、情報化の研究の先駆者でしたが、日本では1960年代に世界に先駆けて「情報化」という言葉と「情報社会」という言葉ができたのです。それがフランスやロシアに伝播して、「情報化」については「アンフォルマチザシオン」（フランス語）や「インフォルマチザーチャ」（ロシア語）という言葉が作られました。英語では、「インフォーマチゼーション」という言葉がようやく市民権を得つつありま



す。「情報社会」に対応する「インフォメーション・ソサエティ」も、まずヨーロッパで、それからアメリカに広がっていきました。それが、まさに大きな意味での経済を超える時代の到来ということになるでしょう。そういうわけで私は、それから「情報社会学」を言い出したのです。

**牛尾** 15年周期説で考えると、2005年から2020年は何の時代になりますか。

**公文** これは新しい「政治の時代」になるはずです。ネット政治を含めてですね。ただし、今度は展開がだいぶ遅いですね。もっとも戦後の復興期でも、52～53年ぐらまでは、まだまだ日本が大きく発展できるなんていうことを思っている人はほとんどいなかった。

**牛尾** そうすると、これからのあと7年ぐらいいちばん重要だということですね。

**公文** ええ。非常に変わっていくと思いますね。

## 内に向かう日本のアカデミズム

**牛尾** 先生方は、アカデミズムの枠を超えて積極的に日本社会の変革に関わろうとされた。それに対して、いまの日本のアカデミズムは、外に出て行くというよりは、いまだに内部での評価が重視されているように思えます。いまだに、外に出て行くことに対して否定的な評価がされている気がします。

**公文** それは、アカデミズムだけではないかもしれませんがね。「グローバリゼーション」という言葉は独り歩きしているけれども、日本では、じつは逆に内に向かう動きのほうが強いことは、ジャパン・ウォッチャーは皆指摘していますね。

**牛尾** たしかに、日本の行政も、グローバルな社会の流れにダイナミックに対応できていませんね。内向きになっているアカデミズムと行政とを、どのように変えていけばよいのでしょうか。

**公文** 大きくいうと、アカデミズムといったような世界がなくなるというか、そういう領域とか境界が融けていくと考えています。いま、現にそうなりつつあるし、そうなるしてほしいと思います。

**牛尾** アカデミズムと官とが一体となって、行政に関与していく必要があるということでしょうか。

**公文** そう思います。そういえば、当時、私たちは大学改革をやるという共通の思いを抱いていました。そこで、佐藤さんと相談して、官との人事交流をやるのがいい

んじゃないかという話になった。官庁から若手のエース級の人を2年間駒場に出してもらって、それが終わったらまた次の人と交代するという仕組みをつくりたいと考えたのです。私は経済企画庁から官庁エコノミストを呼んでくる、君は外務省でいい外交官を探してきてくれということでだんだん話が進んでいるうちに、駒場のある同僚が、「何かおかしいですよ。外務省は交流なんかする気ないですよ。あなた方はだまされているんじゃないですか」と。まさかと思ったんですけども、心配になったので、すぐ佐藤さんのところへ行って「こんな話を聞いたよ」といったら、彼はカラカラと笑って、「そんなことない。大丈夫だ」というんですね。それでしばらくたつと、たしかに現役の課長を出してくれたんですよ。しかし、外務省は交流する気はなかった。出しっ放しで終わりました。

経済企画庁のほうは、駒場のなかに強い反対があった。「官庁エコノミストを連れてくるとは何事か」とか、「官庁とつながりができたら大学は腐敗する」とか、です。しかし何とか頑張って、のちに日銀の副総裁にもなった岩田一政さんを出してもらいました。ところが1カ月もしないうちに駒場で反対を唱えていた連中が突然豹変して、彼の留任運動、つまり役所に帰らないでくれという懇請をして、結局彼は大学にずっと残ることになった。したがって、これも1回だけで終わりました。

## 従来のエリートが不要になる

**牛尾** あの時は官庁が強かったからね。

**公文** それも時代のなかの1つの出来事です。私は、そうした仕組みをつくることは難しいけれども可能だとも思っています。むしろ大学のほうから行政官として入っていくほうが難しいでしょうね。

**牛尾** そうですね。しかし、アカデミズムには、政府と市場とのあいだに入って、両者の対立を緩和するような役割が期待されていると思います。最近のリーマン・ショックは結局、政治と市場が対立してしまい、それで大きなクラッシュが起きてしまった例ですが、アカデミズムの役割をもっと積極的に捉えてもよいのではないですか。

**公文** 『Voice』2013年7月号に牛尾さんが書かれた論考には、なかなかいいことがいろいろ書いてあって、私は赤線を引きながら読みました。要するに、政府と市場との役割分担が基本であって、アカデミズムというのは、どちらかといえば一歩離れた場所にいるというのがこれまでの

関係ですよ。例外的なのは、経済企画庁とエコノミストとの関係、これはもとからかなり緊密なものがありました。

しかし問題は、この政府と市場がどちらも制度としては失敗している面が強くなってきていて、それをどうするかというときに、いわば第3の原理を考える必要がある。いや現に、第3の原理が生まれつつあるといいでしょう。たとえば、米国の気鋭の評論家にスティーブン・ジョンソンという人がいますね。10年ほど前に、『創発(イマージェンス)』という本を書いて、一気に名声を高めた人ですけれども、彼の最新作が『フューチャー・パーフェクト』(未邦訳)です。そこで彼は、この20年間、じつはいろいろな面で社会は大きく進歩していると主張しています。それを支えているのが、新しいタイプの組織であって、彼の言葉でいうと、ピア(仲間)のネットワーク。牛尾さんのいわれる「中核層」はまさにそれだなと思います。私は、「智民」という言葉を使ってきたんですけれども。

**牛尾** いま先生がおっしゃった、政府と市場のあいだでアカデミズムというものの存立する余地がないのは、結局構成している知識や情報や思想をもっている人が、個別にそれぞれ参加する時代になるということですか。

**公文** ええ。中央とか上部ではない、「ピア(仲間)」が重要な役割を果たすようになって考えています。それは高い権威をもった知識人ではなくて、他の人びとと同じ平面で、自分たちの能力を生かして参加できるようなグループを考えられないかということです。政府と市場とのあいだに入ってポジティブな役割を果たせるような個人やグループが生まれる。また、それを支えるいろいろなソーシャル技術やソーシャルメディアが出てくる。さらに、ものづくりのほうにも間違いなく、「ソーシャルファブ」と私は呼んでいます。新しい方式が出てくると思います。

**牛尾** それは、従来のエリートは不要になるということでしょうか。

**公文** そうですね。情報が集中するコンピューターのクラウドを牛耳るトップクラスの少数者は残るでしょうが、それは社会的階層としてのエリートというようなものではないでしょうね。他方、牛尾さんのいう「中核層」が中央政府の民主的な政策の意思決定に直接関与するというのは、実際には難しくはないでしょうか。

しかし、ローカル(地域)だったらそうとうやれると思います。自分たちの仕事の現場、住んでいる地域のことはよくわかっているのですから。そこで、いわば中核層のな

かの中核になる人びとがいろいろな運動を始めたり、情報を集めて、予算の配分なんかについて意見を述べることは可能なはずで、もうそれは、現にたくさんの例が世界中で生まれつつあるということのを先に挙げたジョンソンの本には詳しく書いてあります。

## 行政を補完するピア・ネットワークの誕生

**公文** それから、情報を集めるのも、米国では電話で「311」という仕組みがあるんだそうですね。たとえば、自宅の前の道路に穴が開いているというようなことを、311番に電話をして報<sup>も</sup>せる。そうするとニューヨークだったら、180カ国語で相手をしてくれて、すぐに対応してくれる。

その仕組みが、いろいろな地域に広がっているそうですけれども、それが数年たってみると、まさにビッグデータが集まってくるわけですよ。国中の至るところの細かい状況が自然に集まってきて、いまこの町のここはどうだということが詳しくわかる。それを基にしていろいろな意思決定もできるようになるでしょう。そういう情報収集の仕組みを地方政府は取り入れる一方、行政面では、ピアグループに運営をかなりの程度委ねるという仕組みをつくるべきだと思います。もちろんマーケットが不要になるわけではないけれども、マーケットだけに任せておいてはできないようなニーズをくみ上げるのは、ピアグループになる。いわば中央政府、市場と、そしてローカルな分野でのピアグループという3本立てのかたちで、これからの社会進化を考えることができる。

**牛尾** 市民の情報を蓄えれば大変な地域情報になりますね。アメリカでは「311」だけではなくて、ウェブを使って市民の声を直接集めている自治体も出てきているようです。日本では、いま千葉市が始めているようです。たとえば電灯が切れているとか、全部オンラインで集めているんです。それを役所が確認して、急ぐものはすぐ対応する。あるいは、直す作業もやっってください、お金を渡すから自分で直せるものは直してください、といったことを市民に対してフィードバックしてくる。

**公文** そうですね。それともう1つ、非常に気になる本があります。ジャロン・ラニアーという音楽家で、昔、『バーチャル・リアリティ』(未邦訳)という本を出して有名になった人がいます。彼は、シリコンバレーの有能なIT技術者でもあり、思想家でもあるんですけれども、そ

の彼が、『Who owns the future?(未来は誰のものか)』という本を最近出しました。

私にいわせると、彼はまさに情報社会のカール・マルクスです。今世紀に入って情報化が一段と進むなかで、先に挙げたスティーブン・ジョンソンだけでなく、マット・リドレーとかケビン・ケリーといった人びとが、前世紀後半に支配的だった悲観論を排する「新しい楽観論」を唱えるようになってきました。かつて『ホール・アース・カタログ』で一世を風靡したスチュアート・ブランドも、極端なエコ志向から「エコプラグマティズム」に転向しました。私も、大きくはそうした楽観論に与していますが、それに対するラニアーの批判論は避けて通るわけにはいかないと思います。

彼は、今日の経済ではありとあらゆるデータが少数のサーバーに集まってきて、ここで全部処理されて、利益も基本的に全部ここから生まれるという超独占ないし超寡占状態が発生しつつあるといます。しかも、そうしたサーバーの所有者・運用者たちは、その基になっている情報をほとんど全部ただで取っている。アマゾンにしても、グーグルにしてもそうです。人びとは、サービスの多くがただになったとって喜んで使っているけれども、自分たちが提供している価値ある情報の対価は受け取っていない。しかも仕事の多くは機械がするようになる。だから人間のほうも職も減り所得も下がる一方だ。つまり、ほとんどの人が貧しくなっていくなかで、ごく少数の人だけが極端に豊かになる。この動きは、このままでは避けられない。これにどう対処すべきかというのが彼の問題提起です。

しかも、それが含意していることは、これまでの知識人とか管理者とか役人の多くが職を失う、要らなくなることもあります。典型的な例は、言語学者を全部追放することで生まれたといわれるグーグルの素晴らしい辞書や自動翻訳システムです。大学の授業も、いまや基本はオンラインの方向に移っていて、一部の有名な先生がそこで講義をすれば、ほかの人は要らなくなる。たかだかアシスタント的な役割を果たせば済むことになります。さらに、単純労働もどんどん機械に置き換えられていくでしょう。そうすると、人びとの生活を保障する別の仕組みを補わなければならないようになりますが、いずれにせよ、情報社会ではわれ

われは経済的には豊かになれないかもしれません。

**牛尾** そうすると、いまの動きというのは200年、300年ぐらいのスパンで見て、1つの変革期にあるということですか。

**公文** 200年は続くと思いますが、変革自体はもう数十年前から始まっていたものが、今世紀になって非常に目に付くようになりました。著名な経済学者のロバート・ソローが、「コンピューターは至るところにあるけれど、生産性統計にだけは出てこない」といったのは、97年か98年でしたが、その後数年で目に見えるようになってきた。

**牛尾** なるほど。

**公文** ラニアーはそれだけでなく、サーバーにいろいろな情報が集まるといってわれわれは喜んでいるけれども、それは全部断片的な情報であって、人間そのものではないと批判しています。要するに、断片化された人間と、富とコントロールがベキ法則にしたがって極端に集中する「超ベキ社会」「超不平等社会」が生まれる傾向をどう修正することができるのかということです。

現在は、「大停滞の時代」どころか、技術の発展や改善が「ムーアの法則」に代表されるようなものすごい勢いで進んでいる時代です。その帰結が超不平等社会の定着になるのを許してはならない、とっているわけです。

**牛尾** たしかに、情報社会のマイナス面への対応も必要ですね。最近の中学生、高校生、大学生を見ていると、フェイスブックであれ何であれ、インターネットに出入りして結構会話が行われている気がするんです。そういうエデュケーションな効果を、ネット自体がもつような仕組みというのはつくれるんですかね。

**公文** いろいろなグループができていて、やっているんですが、どちらかというと仲間付き合いから、いじめや中傷が広がったり、楽しい社会を創り出す方向に大きく動いているとまではまだいえないかもしれませんが、たとえば「ニコ動」や「ニコニコ学会β」などにみられるような、よい方向に向かうポテンシャルはあるんじゃないでしょうか。何か、それこそラニアーの指摘する問題を回避できるようなうまいアーキテクチャーをつくって、楽しくやってくれるような工夫がほしいですね。